



白石城。解体して渡道費用になったが、現在は復元されている

戊辰戦争で領地を失った片倉家

日本が1600年代以降に鎖国を続けている間、欧米諸国は蒸気船を開発し、植民地や貿易国を世界中に広げていた。

中国がイギリスに武力と阿片で不平等条約を結ばされたのに続き、日本も黒船で来たアメリカに圧倒的な軍事力を見せつけられ、安政元年(1854)に和親条約を結んだ。

次いで安政5年(1858)に結ばれた日米通商条約は、イギリスとフランスが不利な通商条約を押し付けるといふ緊急事態下だったため大老井伊直弼の責任で締結したが、孝明天皇はこれを激した。天皇は政治上形式的な立場に置かれていることの不満に加え、とても外国人嫌いだったことも原因のよ



北海道移住を相談した傑山寺

うだ。

これがきっかけで天皇を中心に鎖国を続けようとする尊王攘夷派と幕府派に二分し、その対立が日本中を巻き込む戊辰戦争に発展した。

時とともに徳川幕府の力は衰え、長州藩・薩摩藩を中心とする勢力によって幕府は廃止となり、慶応4年(1869)に新政府が誕生した。この頃には尊王ではあっても攘夷の考えは弱まり、進んだ外国の文明を取り入れようという考えに変わっていた。

東北地方の諸藩は奥羽越列藩同盟を結んで朝廷を中心とする尊王攘夷派に対抗したが、明治元年(1868)9月、戦いに敗れた。その結果、仙台藩は領地を三分の一に減らされ、白石は領地・屋敷ともに南部藩に明け渡すことになった。白石城を預かっていた片倉小十郎邦憲は1,400人あまりの家臣を抱えたまま土地を失い収入もなく、伊達領内に留まることも許されなくなった。

故郷を離れ北海道移住を決意

当時、蝦夷地と呼んだ北海道はアイヌが住む土地に、毛皮、ニシン、サケなどの資源を求めた和人たちが入り込む程度だった。しかしロシアが南下して領土が脅かされ、松前藩だけの防備では不安があり、南部・津軽藩に警備を命じ、後に加賀・秋田・仙台藩なども沿岸警備にあたった。

維新後の新政府は蝦夷地を実質的に支配し北辺の警備を固めるために、多数の失業武士に蝦夷地の守りと開拓を託すことを考えた。

明治2年4月、片倉家は藩士2人を上京させて家臣一同の生活の道を探らせ、この蝦夷地移住開拓計画を知った。先祖代々の墓と武士の身分を捨てて移住することは辛かったが選択の余地はなかった。片倉家の菩提寺である



嵐の中の咸臨丸

北海道に新天地を求めて

傑山寺で二昼夜議論した結果、1,000人あまりが移住を決意し、明治2年8月に白石按察府に移住願いを出した。

片倉小十郎一行は幌別へ移住

翌9月13日、按察府から「移住先は幌別(現在の胆振支庁登別市幌別)。自費で移住せよ」と指示があった。開拓した土地は自分のものになるので、自己負担で移住することになっていた。しかし片倉家には資金がなく、政府に援助を求めたが断られたため、山崎屋から3,000両の借金をした。明治5年3月、開拓使は2,500両を支出し、不足の500両は政府が貸付金と白石城の解体材売却代金を開拓経費にあてるという温情で何とかめどがたった。

明治2年8月15日、太政官布告により蝦夷地は北海道と呼ばれることになった。

なんとか資金の準備ができ移住が始まった。第一団は片倉小十郎邦憲と19戸が明治3年6月22日、第二団28戸が明治4年3月16日に出発した。その後も移住が行われ、明治5年までに85戸227人が移住した。

その後は開拓使が直轄事業として移民を受け入れることに方針が変わり、明治4年3月、片倉家から約150戸600人あまりが応募した。この移民は開拓使貫属(土族の身分をもち北辺を守りながら開拓する人)といい、武士の身分を失った者には何よりも魅力があった。

佐藤孝郷が率いる一行は石狩へ

幌別への第2団を見送った翌日に太政官達し状が届き、白石の600人に開拓使貫属が命ぜられた。移住までの間、もと家老である22歳の佐藤孝郷(廓爾)が貫属取締を命ぜられ、移住までの間、組合規則の策定、旅費・諸経

月4日に松島湾口の島港である寒風沢に咸臨丸が入港した。12日に112世帯401人を乗せて出航、次いで数日後に入港した蒸気船の庚午丸が84世帯194人を乗せて21日に出航した。

咸臨丸は9月17日に函館港に寄港し、2日間の休憩の後20日に出航したが悪天に遭遇し、強風に流され現渡島支庁木古内町サラキ岬の岩礁に座礁した。このときに1人が死亡し数百の荷物を失ったが、開拓使には「一人も怪我なく、荷物も陸揚げし安堵した」と報告している。

咸臨丸は離礁できず、機器類を取り外して放棄された。福沢諭吉らの使節団を乗せて日本初の太平洋横断を成し遂げた咸臨丸の最後を片倉家一行が看取ることになった。



一行が着いた石狩は漁場として栄えていた

け、数人の老人が死んでいった。少しでも早く入植地に落ち着きたかったが、混乱した開拓使を相手に順調にはいかなかった。

10月28日、佐藤孝郷は開拓使の呼び出しに応じ、札幌の開拓使仮庁舎(北4東1)に出向き、岩村判官に会った。

「600人の家臣が貫属になったことは開拓使は聞いていない。角田県庁の依頼で開拓監事が札幌本庁に告げずに政府に上申したのだらう」と言われて驚いたという。さらに「すぐに冬が来、本州から初めて来た土族には耐えられないから、来春まで石狩で越冬した方がいい」と言われた。

石狩に帰り相談したところ、一同は「石狩で越冬などとんでもない。風雪を冒してでも開墾を始めたい」と意気盛んだった。早速札幌本庁と再交渉したところ、すぐに土地割渡しを行うことになった。当初は現中央区山鼻地区を指定されたが、豊平川の川原跡の石原で、カシワの木が多くて地味が悪そうだったのでの開拓予定地である望月寒川流域を見、樹木のよく茂る肥えた土地だったのでここを入植地に決め、さっそく入植を始めることになった。

(税務部納税課・編)



北4条東1丁目にあった開拓使仮庁舎。ここで岩村判官と入植についての交渉をした(明治4年)

費・生活資金援助の申請など多忙な役を果たした。一同は荷物を整理し、家財道具を処分して身支度を整えたが、いつまで待っても移住時期が示されなかった。生活の苦しさが深刻化する一方で、入植希望者の結束も崩れてきた。

旧藩士はもちろん、角田県も開拓使に申し入れたが、連絡手段が悪く、開拓使の内部事情や未開拓地が十分に把握されていないなどの事情があって順調には進まなかった。

ようやく船の手配が済み、半年後の9

一行は函館まで陸路を32^キ歩いて戻り、後発の庚午丸に全員が乗って明治4年10月6日小樽港に入港した。岩場の難所が続く張碓を越えて9日に300人、10日に273人、18日に12人が石狩に着いた。1カ月にわたる長旅だった。港には開拓使開墾係の役人が迎えに来ており、分宿の手配をし、衣類、家具、炊事道具などの世話をしてくれた。

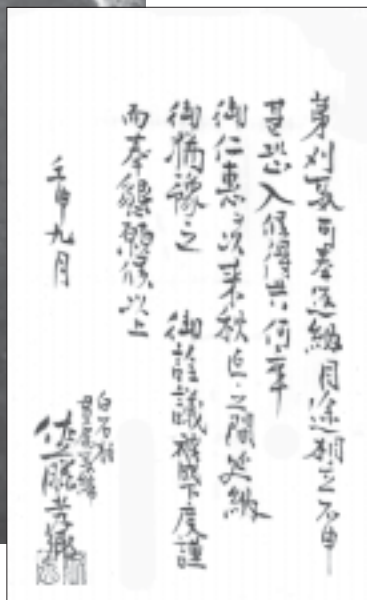
山鼻を嫌い望月寒川流域を選ぶ

旧暦10月は現在の暦では11月半ば。雪まじりの寒風が小屋のなかを吹き抜



簡素な開拓小屋で厳しい冬を越した

白石開拓のリーダー 佐藤孝郷



佐藤孝郷。右は明治5年に孝郷が開拓使あてに書いた文書

激動の時代の若き家老

宮城県白石から札幌に移住するにあたって、一行を率いたのは22歳の若い家老、佐藤孝郷だった。開拓が始まってからも開拓使との交渉、不安・不満をもつ家臣たちを束ねる大役を果たした。彼なしには白石開拓の成功はなかったといってもいい。その佐藤孝郷はどういう人物だったのだろうか。

佐藤家は主君の伊達家、片倉家と同様に藤原鎌足の血を引く家柄である。佐藤家は片倉景綱の若い頃苦勞をともした重要な武功の家臣であり、その功績により佐藤家第6代の直好から永代着座家老となった。

そのため嘉永3年(1850)に生まれた

孝郷は慶応2年(1866)に16歳の若さで家老職を継いだ。260有余年続いた江戸幕府が終わりを迎える前年である。

家老就任後間もなく戊辰戦争が始まった。明治元年(1868)、奥羽25藩が白石城に集まり白石同盟を結んで結束を固めたが、18歳の家老孝郷はこの重要な会議でどういう役割を果たしたのかは不明である。

戦争に破れ、仙台藩は禄高を減らされた。白石を預かる片倉小十郎は玄米55俵と、無いに等しいまでに減らされ、家臣団7,459人は失業して路頭に迷うことになった。

生きる路は北海道開拓のみ

ある者は地元にとどまり百姓となり、

ある者は主君長男の片倉小十郎景範とともに明治3年(1870)現在の登別市幌別に移住した。このときに家老の佐藤孝郷も加わって北海道の状況を調査し、翌年正月に帰郷した。

残る者の移住がなかなか決まらず、資金が底をつく状況のなかで孝郷は再三にわたり白石県や角田県に交渉したがいっこうに事態は進まなかった。

明治4年3月17日、ようやく太政官は角田県在留の家来600人に北海道移住開拓使貫属を命じ、後日、佐藤孝郷に貫属取締を命じた。

孝郷が取締を命じられたのはもと家老だったという理由だけではなく、維新の後の混乱した事態をまとめ、ここ

までもってきた統率力が評価されたからだろう。

佐藤孝郷に率いられた600余人の老若男女の大集団は、咸臨丸が座礁する事故を乗り越え、10月9日に石狩に到着した。

しかし、いつまでも入植地が決まらず、一行は厳寒と食糧不足から不安に駆り立てられた。孝郷は彼らを慰め、励ましながら開拓使と交渉を続け、さらに開村への計画説明など息つく暇もない毎日だったはずだ。

そんなとき役に立ったのは先年幌別へ渡った体験だった。それをもとに「北海道国名廃止建白書」(明治4年11月・北海道文書館蔵)を記して開拓使に提出して驚かした。この一編は、知識人孝郷の印象を強くし、さらに引率力と実行力を認識させることになったのである。

才能を認められ役人の道へ

入植の翌5年春、孝郷は他の同胞同様荒れ地を開墾し、畑を広げるつもりだった。しかし、彼の実力を知った開拓使は5年4月16日に孝郷を呼び出し、白石村貫属取締戸長を命じた。この役職は多忙を極め、開墾に従事する余裕はなく、自然に役人の道を進むことになった。

- その後の彼の足取りをみると、
- 6年 札幌学校漢学助教授兼舎監(23)
 - 7年 札幌町戸長兼白石・雁来両村戸長(24)
 - 8年 札幌区初代戸長(25)
 - 9年 開拓使13等出仕(26)
 - 11年 黒田長官とサハリンへ随員(28)
 - 13年 開拓使6等属 記録局公文課(30)
 - 14年 札幌郵便取扱役(局長役)(31)
 - 15年 養子安親に郵便取扱役を譲る(32)
 - 17年 大蔵省主税局判任4等属(34)
 - 33年 現慈恵医大漢学講師(50歳)となっている。

また、開拓使の役人となった彼は住居を次のように変えている。

白石村28番地 安斉篤敬と同居

上白石村13番地 安斉と同居
札幌区南2条西1丁目
東京都白金台(詳細不明)

多くの若者を役人に登用

孝郷は若者の教育の重要さを考えていたとみえ、最初の土地割り当てでは善俗堂学問所(白石小学校の前身)用地を確保している。また、時の政府の方針に沿って若者の医学進学、農業修業への道に15人もの進出を取締戸長として支持している。

その他開拓使への就業、巡査、電信係などの就職先を紹介して、明治5年から14年までの間に54人もの若者が北海道開拓への道へ進んでいる。

しかしこのことは、白石村、上白石村農業開墾を支えていたのは、老人や女性の手にゆだねられていたと推測されるから、当時の孝郷評価はどうであったのだろうか。

孝郷の札幌在住は、わずか14年数カ月にしかならないが、彼の業績を示す文書が数多く、北海道文書館や北海道開拓記念館で見ることができる。筆跡から想像できるのは、端正、精緻、漢文調の語句使用から教養の高さなどである。

孝郷は札幌を去る理由を「旧藩主片倉景範が幌別から白石村へやってきた。

嫌焉(けんえん=心に満足しないさま)たるものがあつたから」と述べている。

もう一つの理由は、養子安親の部下が金銭的不祥事を起こしたため、保証人の彼が私財まで提出しなければならなくなったこともある。

孝郷の思想は「比例均衡」にあった、と教え子の飯田芳久氏が日本医事新報(昭和35年9月号)で述べている。

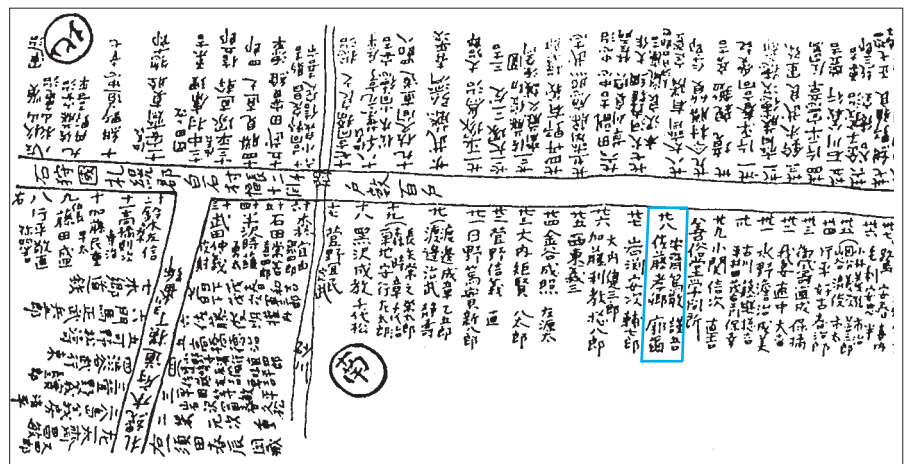
授業ぶりはユニークであつたらしく、教室に入るとまずは東方に向かって、かしわ手を打って礼拝し、おもむろに教科書にも礼、漢文読みは朗々、時には自作の漢詩を挿入したという。時事談義には熱が入り、授業は脱線がよくあつたそうである。

慈恵医大の高木兼寛学長の信任が厚く、伝記の執筆を行っている。

大正9年8月白石村を訪れているが、9月の開村50年記念式典には出席せず、祝辞のみを届け「今や往事ヲ回想シ朝夕感慨不堪ヘズ」と発展ぶりに期待した言葉を述べている。

砂糖をなめるのが好きだったという孝郷は、胃腸病を患い、治療の甲斐なく大正11年1月10日、72歳で生涯を終えた。白石から惜しい大人物を失ったとしみじみと思われる。

(中濱康光)



佐藤孝郷の土地は右28番、善俗堂(現在の通3丁目南)の西寄りに位置する